

成人向け

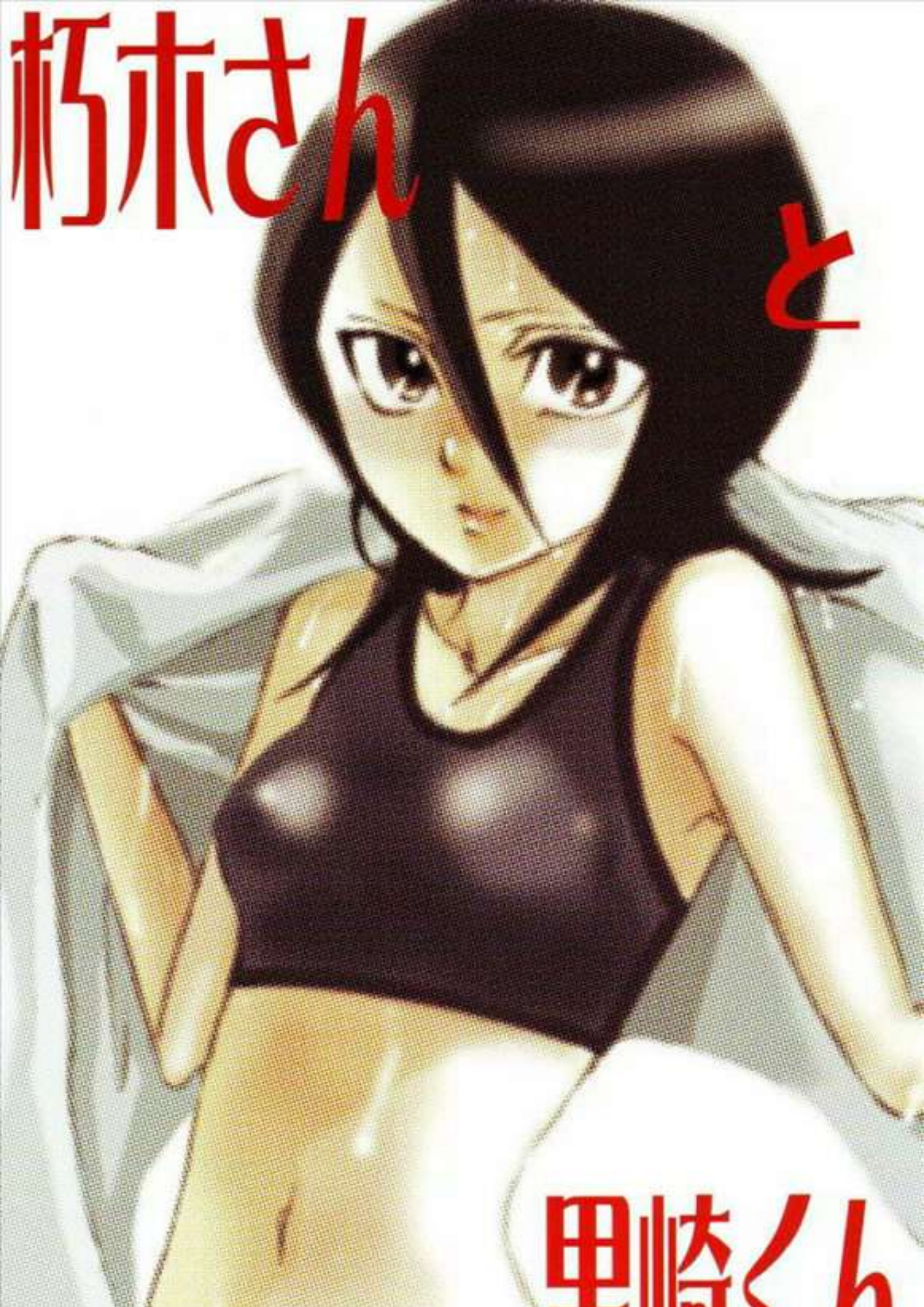


朽木さんと黒崎くん。

朽木さん

と

甲崎くん



「けっっっ… 私のおしゃれメガネがべとべとになったではないか… たわけ…」

「ワ… ワリイ… つい…」



「すげえよルキア、やっぱこう

丸見えじゃなくちやな。」

「あう・・脱ぐのは駄目だと言っただろ！」

「誰か来たらどうするのだ・・・」

「じゃーとっとと済ませようぜ」

「あ・・ああ！」





うあー
朽木さんが
ブルマー！

まじ
ラッキー☆

かっわい！

あああすも
ルキアたん…
んんん…

つるか
まじ小せえ！

ちんちんお前ら
出でけんよ
女子に聞かれんぞ！

なあ…
まじ…

つきあいてーよ
なあ…





なー皆して
告つてみねえ？

数打ちや当たる
方式！

誰かが付き合えたら
皆にまわす約束で！
独り占めは無し！

オイオイ！
まわすつてどういう
意味だよ（笑）



・・・黒崎くんの事は、
ちよびり羨ましいかな・・・



朽木さん？
可愛いと思うよ

んーでも

別にボクは
付き合いたいと迄は
思わないけど・・・



お前はああいうのは
タイプじゃないっけ？



ボクは
何もかも知ってる・・・

・・・そう

ひみつ、

ひみつ

ルル

お前なんか知つてんの！
何か見たんか？
証拠は証拠！

黒崎と？

やっぱ付き合つてんのか

えつ？・・・

どーゆう意味？

朽木さんと黒崎くんの関係。
愛しい朽木さんのもう一つの顔。



ボクだけのもの

朽木さん……

9

朽木 恋さんと 黒崎くん。



「……も、もういいだろう、いつからお前はそんなに助平になったのだ！」

「……だーめた、もつと指で抜けて見せてみようよ、へえ、こんな明るい所で見るとあれだな、お前本当に一本も毛まえてないのな。」

「なう……」

「……やらしーな、お前」

「まう、貴様に言われたくないわ……」

「……オレ、お前も、お前の「ニ」も、すげー、好きだぜ……」


「……な……何を言っているのだ……」

二人は校舎内で人の居ない場所や、施設のできる教室を知り尽くしている。学校でセックスをする事に溺れている。そしてそれはホクも同様である。観察・記録する側、として。



自ら舌を絡めながら、
朽木さんは黒崎くんのスボンに小さな手を這わせ、
硬くなったモノを探りあてると、
いとおしとくにはつくつくといと撫でる。
口付けの最中だといふのだ。
その隙は聞いたまままで、
おあすけをくらくらしたベットの様に、
物欲しげな眼差しを向けていた。





黒崎くんの唇と舌先が淫らに朽木さんを受撫する。
「あああつ……あ……いち……ご……」
朽木さんは身体を強張らせ乍ら、
両手で自らの股間をギュウと抑えた。
クリトリスをいじりたくてたまらないのだろう。

黒崎くんの手の平にすっぽりと収まってしまふ程の
小ぶりの胸。

しかし、なんだ、意外なあのポリウームは。

指先で触れられただけで、

朽木さんの真つ白いおっぱいの肉は、

そこだけ別の生き物の様に、ぷにゅぷにゅと揺れる。

その頂には、つやつやとした薄ピンク色の乳首が

いやらしく腫れあがっている。

黒崎くんが、夢中になるのも無理はない、
と思う。



次第、指の抜き差し、速度をあげていく。
クチクチと、いやらしい水音が響き渡る。
黒崎くんは自身の王手を抜くかの様に、
半ば乱暴に朽木さんの内壁を揺る揺る抜く。
「あああああーあーあーあはあああー」
朽木さんが甲高い声をあげると同時に、
ヒヤヒヤと透明の液が噴き出した。

時々クリトリスを擦りながら、
指を陰茎にゆるゆる挿入させる。
「すけ……ルキア、どんどん
溢れちゃうせ……おまのふり」
「あ……や……だ……」

黒崎くんの、限界まで膨張したそれを、朽木さんが小さな口で愛撫する。全て口に含む事はできない代わりに、丹念に亀頭を舐め廻し吸い上げ、唾液とカウパーを混じらせながら手で優しくしこみあげる。暖急をつけ、黒崎くんの反応を味わい乍ら、





「うっ……ルキア……」

「……うさ……ひもちいい……か？」

「あ……ああ……すげえ……イイ……」



「ウツールキアッ！でる……ぞ！」

ビュルツビュルツ……

朽木さんの喉奥めがけて真っ白い精液が飛び散る。

「んあっ……いひ……すごい……濃いつ……♡」



「ルキア・・・ワライ沢山出ちまつたな

べーしてもいいぞ・・・」

「ん・・・う・・・らいじよふだ・・・この位・・・」



朽木さんは手のひらに受けた精液をシユルシユルと飲み干した。
最後の一滴まで、いとおしげに舐めとる。
・・・朽木さん、幼く愛らしい顔をして、
そんな事をするなんて・・・。



カーテンの隙間から差し込む強い陽光に晒されて、
愛液にまみれた朽木さんのクリトリスがぬらぬらと光
黒崎くんが、その風貌に似合わせ程に
意地悪げな笑みを湛えながら、陰茎をゆっくりと抜き
「ルキア、自分でささ、さわれよ……」
朽木さんは可愛らしい困った顔をしながらもそれに応
白い指先で円を描くようにクリトリスを撫でると、
途端に甘い声で鳴き始める。

「…あ…あは…ああ…だめ…こんなやつ…
すぐ達してしまふ…のだつ…」

黒崎くんは、朽木さんが蕩ける様な表情になった瞬間
パンパンに太くなった陰茎を最奥までねじこんでやる。
「ああああ！」

その一突きで、朽木さんはいつも達してしまふのだ。

「あひ……」

「……」

「んん……せんか……は……」

「……」

「……」

「……」

「……」





「はああつ……あつ！一護お……！」
黒崎くんはいとも軽々と朽木さんを抱えあげ、蹂躞する。
それはまるで小さな雌猫との交尾の様で、
観ているととても倒錯的な気分になる。
融合した二人の身体が激しくリズムを刻んで、
肌から汗が、露わな結合部からいやらしい体液が、
ぼたぼたと床を汚していく……

「ルキアッ……なかに出すぞろ……あ……う！」
「二護っ……！」

ビュルルッ、ビュル、どろん、どろん……

黒崎くんの精液は濃く量が多くて、

朽木さんはたっぷり時間をかけて膣内に射精されて、

それを飲みこもうと膣内が収縮するのだろうか、

朽木さんはいつも全身を痙攣させながらういてしまう。



黒崎くんが勢いよく陰茎を引き抜くと、

引き抜く際の強烈な締め付けが最後の射精を催し、

それは勢い良く弧を描いて朽木さんの胸まで飛んだ。

そして、朽木さんの真ピンクに充血した性器から、

大量の精液がとろとろと溢れ出し、

二人は事後の放心に暫し酔いしれるのだ……

こんにちはー GATARI です。
またもや、奇妙な本になって
しまいました。

自分史上最短の作業日数で、
色々と恐ろしいですが、
一度こんな感じのイラスト+文章本
作ってみたかったので、
楽しかったです。

今夏はけっこうな数のカラー絵を描いたなあ。
これからも沢山描いて早く上達したいです。
それではまたお会いしましょう。

2006年夏 GATARI



朽木さんと黒崎くん。

発行日；2006年8月12日

発行元；SUCK DROP BAMBIES

発行人；GATARI

E-mail；sdb_gatari@yahoo.co.jp

18才未満の購読を禁じます。

朽黒

ホさんと

崎くん。



SUCK
DROP
BAMBLIES